

第4回全国邦楽合奏フェス in 徳島 開催



2016（平成28）年12月9日～11日「第4回全国邦楽合奏フェスティバルin徳島」が徳島県神山町神山温泉ホテル四季の里、徳島市のあわぎんホールで開催された。初日は神山町でのシンポジウム、2日目は講習会、ワークショップと徳島邦楽ルネッサンスとのジョイント企画コンサート「邦楽と洋楽の止揚」が開催された。最終日は全国邦楽合奏コンサートが企画され、徳島県の城東高校、鳴門中学校、高浦中学校で組織された徳島県学校邦楽育成会による若さあふれる「秋の一日（長澤勝俊作曲）」の演奏などが披露された（写真）。展示ではアジアの民族楽器展など多彩な催しが行われた（関連記事2～5面）。

初のシンポジウムも開催

2016年12月9日全国邦楽合奏フェスティバル初の企画となる「～あわ邦楽サミット～ ＜徹底討論！邦楽未来への行動＞」と題したパネル討論会が徳島県神山町の神山温泉ホテル四季の里で開催された。

全体会に先立ち釣谷真弓氏による「シルクロードにみる和楽器のルーツ」と題して講演が行われた。全体会を受けて「東京オリンピックの向こうに何を描くか」「邦楽発信！行政、財団、民間、マスメディアとの連携」「次代リーダーを育てるためにやるべきこと」「流派のあり方はこれでよいのか」をテーマに分科会で活発な討論が行われた（関連記事2面）。



▲左から司会の田中隆文本会副理事長、飯泉嘉門徳島県知事、木南征美徳島県議（都山流尺八大師範）、松岡斉日本総研所長、内丸幸喜文化庁文化部長、宮城治男ETIC代表理事、米田豊彦徳島新聞理事社長の各パネリスト（2016年12月9日徳島県神山温泉ホテル四季の里）

主な記事

- 2,3面…第4回フェス 神山温泉シンポジウム
- 4面…第4回フェス ワークショップ・関連公演
- 4面…第4回フェス実行委員長ごあいさつ
- 5面…第4回フェス 邦楽合奏コンサート
- 6面…第5回全奏協全国邦楽コンクール結果
- 6面…第6回全奏協全国邦楽コンクール募集
- 6面…理事長ごあいさつ

総会告知

開催日：2017年6月4日（日）

時刻：13時30分（予定）

場所：東京芸術劇場 小会議室5

171-0021 東京都豊島区西池袋一丁目8番1号
（終了後交流会を予定しております）

日中国交正常化45周年記念 全奏協中国大連公演 2017年5月に決定

2017年5月21日～22日に全奏協主催で中国・大連での交流行事が決定した。

21日はアカシアウィーク開幕式と夜のレセプション参加、22日はジャパンドイ、交流コンサートが予定されている。

（理事 英崇夫）



▲2016年3月 交流演奏会（中国大連）

全体会 「徹底討論！邦楽未来への行動」

- パネリスト（発言順）
飯泉嘉門（徳島県知事）
木南征美（徳島県議会議員／都山流尺八大師範）
松岡 齊（一財・日本総合研究所所長）
内丸幸喜（文化庁文化部長）
宮城治男（NPO・ETIC 代表理事）
米田豊彦（一社・徳島新聞社理事長）
- 司会：田中隆文（邦楽ジャーナル代表/編集長）

田中：邦楽の未来について具体的な行動に結びつく様など意見を伺いたい。

飯泉：徳島は伝統文化の県。阿波踊りの伴奏には邦楽器が使われ生活に根付いている。国民文化祭も2度やっている。オリパラでの文化イベントもあるので、今後、若い人への発表の場を作りたい。

木南：40年前徳島邦楽合奏団を作った。現在は県議会の議場での演奏会を企画しアマチュアの発表の場としている。流派の壁がまだあり壁を超えるためには楽譜の統一が必要。ハードとソフトの整備が発展の道。

松岡：途上国などの支援の枠組みづくりで海外に出ることが多い。会議後の晩餐会では自国の文化を紹介する。来日外国人も増え和食も世界遺産となりセットで邦楽を売り込んでどうか。邦楽発展

には教育が大事で、小学生から長期視点で邦楽人口を育てること。

内丸：世界中で文化政策が国力となり存在感となっている。文化の経済的価値を意識する。オリパラ文化プロジェクトの活用と他分野、特にメディア芸術とのコラボが今後の鍵だ。



▲全体会（12月9日徳島県神山温泉四季の里）



▲シンポジウム参加者達（2016年12月8日 上宮大栗神社（かみいちのみやおおあわじんじや）で）

宮城：地方創生の立場から若者と関わっている。徳島生まれなので、子供の頃から無意識に邦楽が染み付いている。神社には人が集まる。若者の価値観も「収入より生きがい」に変わりつつあり、地方で邦楽が伸びる要素は十分にある。

米田：新聞社として阿波踊りを主催している。邦楽の敷居が高い。昔は花街で身近に楽しめる邦楽があった。余裕の邦楽を取り戻したい。カラオケでなく生の邦楽器で歌を歌いたい。そんな機会が大切。（敬称略 T）

司会の徳丸氏からオリパラ（五輪・障がい者五輪）のために何をしているかの問いに自己紹介を兼ね各自が取り組みを紹介。東野氏は来日観光客は世界的同質化の中で自国と違う文化や音楽を求めることを指摘。谷垣内氏は邦楽の数値化による証拠付けが行政を動かす力だと氏の活動を紹介。

聴衆席の飯泉氏（徳島県知事）は子供達に多分野の音楽に触れさせたいと実施政策を紹介した。

徳丸氏は海外から日本特有の文化が求められる中、海外で邦楽を教えられる人の養成の大切さを提起。さらに、'88年ソウル五輪で韓国の邦楽である国楽を世界に示し後に国楽院整備や国楽を学ぶ学生の増加につながった事例からオリパラ後を見据えて海外にどの様に文化発信していくか問う。

聴衆席の内丸氏（文化庁）は日本文化の存在感を持たせるため20万のオリパ

分科会 A 「東京オリンピックの向こうに何を描くか」

- パネリスト：
大西晴一二（琴古流尺八美風会副理事長）
菅原久仁義（尺八演奏家）
谷垣内和子（公財・日本芸能実演家団体協議会実演芸能振興部企画室長）
東野 珠美（笙演奏家 作曲家）
前田 智子（社団法人日本作曲家協議会会員 作曲家）
- 司会：徳丸吉彦（聖徳大学教授・音楽学研究家）



ラ事業の活用を訴える。菅原氏は和楽器を使えば邦楽かと疑問を呈し日本人の感性にこだわり伝えることが大切と指摘。大西氏は文化で地方の再生・創生を訴え、それを受け、前田氏は民謡など地方土着の文化と三曲など全国的な邦楽との融合の必要性を提起。そのためには、音楽家、聴衆、行政の連携がオリパラ後の活動にも活きると訴えた。（T）

全体基調講演の後、分科会としてメディアとの連携について、議論を行った。邦楽は、比較的閉じたコミュニティとして発展しており、活用するメディアも口コミ、会報、専門誌などが中心であった。一方、情報化社会の中で、情報発信のあり方も変化してきている。



分科会 B 「邦楽発信！行政、財団、民間、マスメディアとの連携」

- パネリスト：
今藤政太郎（長唄重要無形文化財保持者）
植田 和俊（一社・徳島新聞社理事長）
白井 純（公財・東芝国際交流財団理事）
藤本 草（公財・日本伝統文化振興財団会長）
松尾 祐孝（日本現代音楽協会理事 作曲家）
- 司会：立花茂生（NPO 全国邦楽合奏協会常務理事）

また、邦楽発信を行政、財団等のサポートを得て実施したい、新しい楽曲を準備したい等ニーズも高まっているとの観点より、議論を行った。邦楽界の立場から重要無形文化財保持者、今藤政太郎氏、メディアの代表として徳島新聞社理事長植田和俊氏、助成する立場から、東芝国際交流財団理

事 白井純氏、日本伝統文化振興財団藤本草氏、作曲家の立場から松尾祐孝氏によって活発な議論を実施した。助成する立場からは、邦楽のコンテンツがほとんど売れない状況などの課題が報告され、メディアからは、話題性のある発信が重要との指摘がなされ、予定をオーバーする活発な議論が交わされた。（立花茂生）

オープニング講演

シルクロードに見る和楽器のルーツ



釣谷真弓氏の講演要旨

2015年5月、韓国で行われた韓日伝統芸術交流音楽祭（日韓国交正常化50周年記念）に参加したVTRで説明します。日本の箏と韓国の伽耶琴は奏法、形態が似ており、兄弟のような楽器といえます。中国の瑟（25弦）を与えようとしたら姉妹で奪いあいになり、父が十二弦の伽耶琴と十三弦の箏に作り変えたという逸話が1233年に書かれた教訓抄に載っています。この逸話から箏には「争」という文字が使われています。英先生が持っている楽器が韓国の棒で叩く琴、コムゴ（写真）です。

韓国のリズムは騎馬民族ということもあり、3拍子を中心に多くが確認されています。日本のリズムは農耕民族の影響と思うのですが、日本の伝統音楽は4拍子で、そのリズムは踊りにも反映されています。

これから紹介するVTRは昨年釜山で行われた韓日伝統芸術交流祭でアマチュアの国楽合奏団オウルリムの演奏を撮影したものです。このグループと金沢で合同演奏をする予定です。（T）

分科会C

「次代リーダーを育てるためにやるべきこと」

●パネリスト：

佐藤 ぶん太（津軽笛奏者）
高橋 久美子（作・編曲家 作曲家グループ＜邦楽2010＞代表）
時田アリソン（京都芸術大学伝統音楽研究センター所長）
利根 敬通（一財 利根英法基金理事長）
藤本 昭子（地歌箏曲演奏家）
●司会：藤本 玲（NPO全国邦楽合奏協会理事長）

佐藤氏は言う。カッコよさを惜しみなく高みを目指す演奏を教える環境作りとして、ギネス世界記録に挑戦し4000人に笛を指導。あこがれを持ってもらう試みとしてNY公演を実施。新しい試みを許すことが一番大切だ。

高橋氏は言う。洋楽と邦楽だけでなくダンス等色々なものとのコラボ。邦楽人のバイリンガルの要素で一人が複数の楽器をやるのが大切。五線・縦譜両方勉強

が必要。それらのトレーニングの積み重ねがリーダーの素養。

時田氏は言う。鑑賞・演奏・創作の三層の確立が大切だ。英語で日本音楽紹介をするコースを主催。外国人が日本音楽に興味を持っている。教育制度での邦楽強化。NHK育成会に見る多様性を持つ

学校が必要。優秀な洋楽の人に邦楽を教える。

利根氏は言う。コンクールの開催。演奏の場を作る。演奏の場やコンクールでの交流が刺激を生み競争が生まれる。よい演奏を聴くことにより他に刺激を与える。

藤本（昭）氏は言う。古典の伝承の必要性、守るべきものは時間と手間がかかるが大事。基本は和洋の垣根なくきちっと楽器を鳴らし歌う事。時代にふさわしい表現で伝承。

以上をふまえ、仕事の場や演奏の場、学ぶ場の確立が急務。時代に即応したやり方が大事だが守るべきことは守る。会場の宮城治男氏から「邦楽を学ぶための留学方法はあるか？」の質問あり谷垣内和子、藤本草両氏が回答。松尾祐孝氏からも貴重な意見があった。（藤本玲）



分科会D

「流派のあり方はこれでよいのか」

●パネリスト：

東音新井康子（長唄三味線演奏家／東京藝大非常勤講師）
酒井 松道（明暗虚竹禅師奉讃会総本部会長／竹保流尺八三代宗家）
米川 敏子（公社・日本三曲協会常任理事／生田流箏曲研学会五代家元）
成川 美佐（徳島邦楽集団事務局長）
三塚 幸彦（尺八演奏家／製管師）
●司会：田中隆文（邦楽ジャーナル編集長）

「流派」は邦楽を形作る根幹だ。邦楽の発展を阻む事象もよく聞かれる。流派・会派とは何か。長所と短所はどこにあるのか。それらを明らかにして邦楽の未来を考えたい。

三塚氏は言う。流派は自分を特化するために分かれて出来たもので、それを守るためなら所属している者に縛りをかけるのは当然。そこで「交流」が阻まれる。

成川氏は言う。徳島邦楽集団を例にあげると、いろんな流派の人

がいて古典を合奏するのは難しい。『六段の調』でさえ押し手の弾き方や間の取り方が違って、そこにもどかしさを感じる。

米川氏は言う。大学の邦楽科なら他派の教授を受けることが出来る。時代は変化しつつある。古典の合奏に関してはどんな流派・会派とでも努力次第で出来る。五線譜のような共通譜を作るのは理想だが、長い歴史を考えるとそれ

は難しい。家元が技術や様式の違いを守っていくことは大事だが、それにプラスして音楽に対する柔軟性というものが必ず必要だ。

酒井氏は言う。楽譜は皆違うから面白い。「フホウエヤ」で吹くと、地歌でも何でもまったりした音になる。これを本曲ととも、100年続いた竹保流として守っていききたい。

新井氏は言う。長唄界は関東だけで30～40の流派がある。長唄東音会は藝大卒業生の会で、他流派の人との交流も増えている。しっかり古典の基礎を学べばそれが出

来るようになる。藝大は柔軟な姿勢でやっているが、流派のそれぞれの様式は、伝承芸能として大きな役割を果たしていると思う。

会場の今藤政太郎氏からの「家元制度は制度疲労を起こしている」という発言は印象的だった。（田中隆文）



あくびを噛み殺せ！

講演・WS

尺八
講演

■「鳴るほど・ザ・尺八吹奏上達法（菅原久仁義）」では、声帯の動画も交えて声門と唇の空気の調節を説明した。尺八の音は声門を閉じ気味にすることで良い音が出る。唇は補助的であり、下腹で横隔膜を支えあくびを噛み殺した時の口腔の形でささやき声を発する様に奏でると良いと解説した。

■尺八「古典本曲の真髓」（酒井松道）では一節切から伝わる「フホウエヤ」譜を使う「明暗真法流」を説明、都山流や琴古流でも「ウ」や「ヤ」が残っていること、「ロツレチ」譜に比べて関西方言の柔らかい音感を「フホウエヤ」は持つこと、都山流本曲に明暗真法流の手



法が使われていること等を説明。「手解鈴法曲」を聴衆と演奏することでその魅力を伝えた。

◀酒井松道氏の「古典本曲の真髓」講習

三弦
講演

サワリは地歌の「命」

■「地歌『一節一撥』の魅力（藤本昭子）」では、地歌三弦の「命」のサワリとその魅力を伝えた。気温等環境でのサワリの変化を説明。「音を上げて下げて指で押す」「付きづらい場合は和紙を使う」等サワリの付け方も実演。もう一つの魅力である「歌」を「黒髪」を例に「大きい声ではっきりと」「背を真っ直ぐに」と解説した。



◀藤本昭子氏による「地歌『一節一撥』の魅力」

新技術で 絹糸の復権を！

箏糸
比較

■徳丸吉彦が絹糸の復活を目指すのはその音色だけではない。強く張られたテトロン糸を一生弾く箏奏者の体を守るためもあるという。しかし、配合飼料を使う現在の養蚕では強度のある絹糸は作れない。昔の養蚕法が継承される皇室から蚕の白絹品種「コイシマル」を譲り受け、大日本蚕糸会と共同で9ヶ月切れない絹箏糸を開発した。テトロン糸との聴き比べでその奥深い絹糸の音色が披露された。



▲左から徳丸吉彦氏（司会）、米川敏子氏（新絹糸担当）、内田道子氏（テトロン糸担当）

カンガルーと リプルに期待！

皮革
比べ

■猫皮犬皮が入手困難になるなか、代替のカンガルー皮、学校や海外利用を念頭においた新人工皮「リプル」の音色が比較演奏された。1尾から9丁分とれるカンガルー皮は音もよく雨にぬれても破れないなどの事例も報告された。リプルも音ではほぼ差がないものの硬いため弾きづらく改良の余地があるとの指摘があった。最後に今藤政太郎が、正規のルートで輸入できるカンガルー皮と言えども天然素材のため

輸入できなくなる可能性もあり人工皮の開発が急がれると締めくくった。「尺八銘管吹き比べ」は実行委員長挨拶参照のこと。（この記事、敬称略 T）



▲東青新井康子（左 カンガルー皮担当）と東音三木千佳子（猫皮担当）の各氏が違う皮の三味線の音を比較演奏

展示・体験

現代邦楽作曲家連盟、作曲家グループ＜邦楽 2010＞、邦楽ジャーナル、6工房の尺八銘管展示、3Dプリンター尺八、セラミック箏爪等が展示即売された、体験コーナーでは三曲楽器のほか阿

波「ぞめき」、阿波人形浄瑠璃、弘前ねぶた笛など地方色豊かな芸能楽器も体験できた。（T）



▲津軽笛の体験指導をする佐藤ぶん太、氏（右）

(1面続き)フェス(邦楽合奏フェスティバル)は今回で4回目だ。12月11日の最終日に行われたコンサート(邦楽合奏コンサート)には回を重ねたことでの成果が見られる。第一に5つの小中高生チームの参加だ。第1回阿南フェスでは2チーム、前回の金沢では3チームなので着実に若い層の参加が増えていと言え。第二に12月9日に行われたシンポジウムの分科会テーマともなった「流派の壁」をはっきりと超えつつある演奏が見られたことだ。団体流派の壁を超えた演奏としては東日本大震災を契機に始まった「光

咲む刻(高橋久美子作曲)』を演奏する会」があるが今回新たに「世生生(前田智子作曲)」を演奏する会」がコンサートに参加した。この曲は上田流尺八道創立100周年記念曲という極めて流派性の強い

曲だが、今回は上田流はもちろん都山流各派、琴古流各派、古典本曲系、独立系の尺八奏者17名が参加した。曲の魅力と邦楽合奏フェスティバルの雰囲気がかさねたかもしれない。第

三に合奏団の壁を超えた演奏があった。瀬戸内地方で活動する4団体が「アンサンブル瀬戸」として、ディベルティメント(佐藤敏直作曲)を演奏した。また、大阪の合奏団「鼎」の委嘱

曲「ステラオブあかね.M.エンジェル(前田智子作曲)」を大分の「韻」が取り上げたことは、このフェスでの人的繋がりの広がりを感じられ第5回フェスにつながる取り組みだ。(T)



▲4合奏団合同でのアンサンブル瀬戸の「ディベルティメント(佐藤敏直作曲)」の演奏

結局、最後まで聞いてしもうた！ ～邦楽合奏コンサート～

邦楽サミットは邦楽各分野で活躍するリーダーと行

政・政治・起業・社会研究家等外部有識者が邦楽の未来について意見交換した。多くの著名人の話を徳島で聴けるとは思ってもみなかった。邦楽関係者以外にも聞

いていただきたかった。ワークショップ・講演会では



▲12月10日、邦楽ルネッサンス「洋楽と邦楽との止揚」での「巨火」の演奏

公演後まで個人的に講師に話を伺う様子が見られた。アジアの民族楽器、尺八工房の展示、3Dプリンター尺八の展示など直接手にとって触って楽器を感じることが出

来たのが良かった。

なかでも邦楽合奏コンサートを聴いた友人は「何曲か聞いたら帰る予定だったのが後一曲、後一曲と思いつつ結局最後まで聞いてしもうたわ」という。

コンサート後の交流会では県外の邦楽仲間と知り合え、情報交換でき、邦楽愛好者が一つになった様子を見て邦楽の未来も捨てたものではないと感じた。この取組の継続を期待したい。(実行委員 WS・講習会総括 兼松劉保)

地元開催の役割を果たせた

筆者がパネリストとして参加した～あわ邦楽サミット～の「東京オリンピックの向こうに何を描くか」分科会ではオリンピックに向けて20万件の文化的プログラムを全国各地で実施する計画がある。各地の特色ある題材の文化プログラムを披露する場を作ることが

邦楽の未来につながると思う。

ワークショップ・講習会では、古典尺八の神髄に浸れた。吹奏上達法では尺八吹奏時の声帯の動きをスコープ画像で確認できたことに感銘した。「一節一撥の魅力」は、地歌の基本である調弦の「さわり」の

重要さと発声との関連が興味深かった。聞き比べ・体験、展示コーナーでは、犬や猫の草など自然素材が使用できない時代が到来するなかで新素材が提案され音の比較を実施。3Dプリンターで作られた尺八の音色を竹製の尺八と比較するなど現代的な内容が盛り込まれ今までにない企画だと思った。

また(公財)徳島県文化振興財団と主催の邦楽ルネッ

サンス「洋楽と邦楽との止揚」では徳島出身の作曲家三木稔の「巨火」で邦楽合奏フェスティバル参加者との共演が実現し素晴らしい演奏が披露された。全国邦楽合奏コンサートではアマチュア、プロ、地域、流派を超えて老若男女が交流し地元開催の役割を果たすことができたと思う。

(実行委員展示・体験総括 大西晴一二)

展示・体験

「箏の糸締め体験」の参加者は「糸締め器」が発売されなくなり久しいです。自分で締められれば便利と思い参加しましたが実際にやってみると、糸を強く張ることが難しく、糸締め技術はすぐに習得できるものではないと感じまし



▲糸締めを体験する参加者たち

た。どんな調弦にも対応して糸締めできるお琴屋さんへの感謝の念を深くした」と話す。(T)

▶12月11日の懇親会で歴代邦楽合奏フェス実行委員長が勢揃いした。左から第一回阿南市 藤本玲、第二回三鷹市 立花茂生、第三回金沢市 田中杉美勢、第四回徳島市 山上明山の各氏



第五回全奏協邦楽コンクール結果

2016年8月21日(日)午前10時30分から
寝屋川市立地域交流センターアルカスホールに全27組の参加を得て開催した。【熱の部】【達の部】の最優秀賞は該当しなかった。



【萌の部】
最優秀金賞
藤井美巴さん
「鳥のように」



<全奏協賞>
山内 彩さん
「楓の花」



<審査員奨励賞>
盛本はるかさん
「鳥のように」



<実行委員長賞>
安田壮翔さん
「紅葉」



▲コンクール参加者たち

多くの方のご参加を！

シニア世代を中心にしたコンクールとして始めた全奏協邦楽コンクールですが、第3回より萌(ホウ)の部、達の部、熱の部の3部門制に変更し今回で4度目を迎えます。3部門の中でも、萌(ホウ)の部への参加人数は、回を追うごとに増加しており、未来の邦楽を担う子どもたちの姿に勇気づけられます。

全奏協邦楽コンクールは、当初から予選を実施せず、年齢制限も設けない独特のスタ

イルで開催しています。意欲があれば誰もが参加できる広く門戸が開かれたコンクールです。演奏者には、後日審査員からの講評が送付され、次のステップにつながるように工夫されています。またそれだけでなく、素晴らしい審査員を前にして音響の良いホールを使い、演奏者が気持ちよく演奏に集中できる環境を整えています。是非多くの方々にご参加いただきたいと願っております。

(常務理事 麻植志志)

【審査員】 石川憲弘(箏曲演奏家) 藤本 玲(全奏協理事長)
星田一山(尺八演奏家) 前田智子(作曲家) 吉岡絃子(箏曲演奏家)
の各氏(五十音順)

第六回全国邦楽合奏協会邦楽コンクール参加者募集

■日時：2017年8月12日(土)10時30分開始(予定)

■会場：寝屋川市立地域交流センターアルカスホール(350席)

大阪府寝屋川市早子町12-21

京阪本線「寝屋川」駅東口徒歩3分

<http://www.arukas-hall.com/>

■入場料：無料(整理券不要)

主 催：NPO法人全国邦楽合奏協会(全奏協)
= <http://zensokyo.org/>

開催部門：「熱の部」「達の部」「萌(ホウ)の部」にそれぞれ独奏(4分)合奏(6分)を設ける

■応募条件：

(1)2017年4月1日現在で出場者の年齢(学年)が以下の通り

合奏の場合、59歳以下の出場者がいる時は「達の部」で出場

「熱の部」60歳以上、「達の部」高校1年生以上59歳以下

「萌(ホウ)の部」小学校、中学校に在籍

(萌の部において過去に最優秀金賞を受賞したものは達の部で出場を認める。参加費は7000円)

(2)使用楽器は尺八・箏・三弦(地唄に限る)・篠笛

(3)演奏ジャンルは自由、1パート複数での演奏も可

(4)合奏の場合は、グループ名を明記すること。助演を依頼しての合奏は受けつけない

■応募方法：申込用紙に記入して下記住所まで郵送

(原則として郵送での先着順30組まで受付。応募状況により抽選を行います)

〒586-0018 大阪府河内長野市千代田南町5-8 麻植方

全国邦楽合奏協会大阪連絡支部 宛

■応募期間：2017年4月1日(土)から7月10日(月)までの消印有効(定員になり次第締切)

■審査費用：「熱の部」「達の部」独奏は12000円(高校生は7000円) 合奏は一人あたり8000円(高校生は6000円)

「萌(ホウ)の部」独奏7000円 合奏一人あたり6000円

全奏協会には審査費用の割引があります

審査費用は、後日協会から送付する文書に従って入金してください

■審査員：石川憲弘(箏曲演奏家) 藤本玲(全奏協理事長) 星田一山(尺八演奏家) 前田智子(作曲家) 吉岡絃子(箏曲演奏家)・・・五十音順

■表彰：出場者全員に金賞・銀賞・銅賞のいずれかを授与し、各部門ごとに金賞受賞者の中から最優秀を1組選定する(該当無しの場合もある)

■賞品：

「熱の部」「達の部」の最優秀賞は各3万円と賞状(中学生が受賞した場合は、賞状とトロフィー)「萌の部」は賞状とトロフィー 他に 全奏協賞、審査員奨励賞、実行委員長賞

出場者全員に「審査員講評」を後日郵送

詳細：全奏協大阪連絡支部 HP <http://zensokyoosaka.upper.jp/> をご覧ください

理事長ごあいさつ



理事長 藤本 玲

昨年、第5回大阪コンクールと第4回全国邦楽合奏フェスティバルが無事終了できまして誠に嬉しく、関係各位に心より感謝申し上げます。振り返ると、試行錯誤しなが

らの両主軸事業は、毎年パワーアップをしながら着実に成果を出せていると感じます。

立上げ当初は自分の関係している三曲関係のみの視野でした。がむしろに走り続け5年半を過ぎて思うことは、社会全体からみた邦楽界はごく小さな世界であるという事。されど邦楽の持つ力の大きい事、素晴らしいを実感する期間でもありました。仲間と集い邦楽の楽しさを共有する事は、学びの場であり、邦楽を発信する大きな原動力となっています。私達はもう一回り大きな視野に立って、先ずは仲間である邦楽の他ジャンルにも目を向け、多様性(洋楽含め)のあるコラボや交流を行う事が大事と感じます。その中で自分の芸を磨くことの大事さを発見できると感じる今日この頃です。

編集後記

「この音とまれ(アミュー)集英社刊」1~14巻を大人買いしてしまった。箏をテーマに高校生邦楽合奏の世界を描いたマ

ンガが廃刊や打ち切りもなく14巻まで出続けることは、それだけの需要があることを語っている。アミューの描く箏は、細部まで書き分けられる。主人公の一人、チカ

の祖父が彼のために作った、磯の木目が丁寧に書き分けられた箏、その素晴らしいに「〇百万」と声を発するのは、筆者だけだろうか。ご一読あれ。(T=広報担当 高橋哲也)

全奏協通信

2017(平成29)年3月31日発行

NPO法人全国邦楽合奏協会(全奏協)

<http://zensokyo.org>

〒770-8056
徳島県徳島市問屋町43
全奏協本部事務所
TEL・FAX 088-655-7066

第6号